ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサン教授についての略述

E・ラモート
大谷大学佛教学研究室訳

Louis de La Vallée Poussin
アカデミー会員
一八六九年一月一日　リェージュにて生誕。
一九三八年二月十八日　ブリュッセル（フォレス）にて逝去。

鋭敏で洞察力の深い一つの知性、間断なく覚醒してやまなかった一つの精緻な精神、探究ということに情熱の集中されたその嗜好、またとない一つの目的に向かって緊張したひたむきな精力、そういうものが、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンをベルギー国最大のインド学者にしあげた。その生涯は比較的静穏で、かれの数々の労作の邪魔にでもなったような障碍物は、かれを避けたのであった。

フランス人を父とし、ベルギー人を母とするかれは、地質学者シャルル・ド・ラ・ヴァレー・プーサン、数学者であったフィリップ・ジルベール及びシャルル・ド・ラ・ヴァレー・プーサン、法学者フランシス・ド・モーンジュ、文学者レオン・ド・モーンジュたちがそうであったように貴族という名門の家に属し、それらの人たちとともにベルギーの学問の名をあげたのであった。

かれの祖父エティエンヌ・ピェール・ルミー・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、最後のナポレオン戦争に参加し、一八三二年レオポール一世の懇請によって、ジラール元師指揮下の他のフランス将校と一緒に、ベルギー独立最初の軍隊を組織することに身を委ねた。祖父はナミュールにおいて、マリー・テレーズ・ド・カウエルと結婚し、

四人の男子をもうけた。二男のギュスターヴは、一八二九年にロシェルで生まれ、一九一〇年パリで逝去したが、かれは一八四五年にリェージュで生まれたポーリンヌ・ド・モーンジュ・フラヌウと結婚した。この縁組により四人の子女、すなわち、三男一女が生まれ、その長男がルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンであった。

七歳の時から母無し児であったルイは、かれの弟妹たちと一緒に、母方の祖父母であるモーンジュ家によって育てられた。かれはコレージュ・サン・セルヴェ（Collège Saint-Servais）で、華やかな古典学を修めたが、特にそこで、程なくチョータナグプールへ伝道に派遣されたP・ボドソン（P. Bodson）及び、フランス人のイェズス会修道士P・アンジュ・デュラン（P. Ange Durand）の影響をうけた。かれはギリシャ語研究に情熱をそそぎ、ラテン詩作文に秀でていた。

古典学の課程を終えて、かれは、一八八四年から一八八八年にかけてリェージュ大学の諸講義に出席し、抜群の成績で全試験を通過し、十九歳で哲学、並びに文学の学位（ディプロム）を得た。ルイ・ローエルシュ（Louis Roersch）からは、テクスト批判と文献学との厳格な方法論を学び、一方デルブーフ（Delbœuf）から弁証法の一端を教わった。

チャールス・ライヤル（Charles Lyall）の「アジアに関する諸研究」（Asiatic Studies）の講読は、若い博士に東洋学に対する興味を与えた。かれはルーヴァンに赴き、そこでシャルル・ド・ハルレ（Charles de Harlez）と、フィリップ・コリネ（Philippe Colinet）という二人の晩学の独学者からサンスクリット語、パーリ語、アヴェスタ語の初歩を教わり、また比較言語学の方法論を授かった。

一八九〇年から、一八九三年にいたる三年間のパリ滞在は、かれにこの上ない効果をあらわした。かれはソルボンヌ大学で、ヴィクトール・アンリ（Victor Henry）のサンスクリット語の講義を聴いた。またエコール・プラティク・デ・オートゼテュード（École Pratique des Hautes-Études）では、シルヴァン・レヴィ（Sylvain Lévi）の最初の弟子の中の一人であった。かれはオーギュスト・バルト（Auguste Barth）とエミール・スナール（Émile Senart）とからも、好感をもって迎えられた。それはかれが、友情と理解との交流でもってフランスの東洋学者たちと結ばれていたからであり、そういう交流ということに関して、かれは特に敏感であり、その

交流は、かれの死の間際まで続いたのであった。

一八九三年、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、十九世紀最大の碩学の一人として著名であったヘンリー・ケルン（Henri Kern）の学派に身をよせるため、ライデンに赴いた。ケルンは、ガーター言語をド・ラ・ヴァレー・プーサンに教授した。けだし、ド・ラ・ヴァレー・プーサンなくして、諸宗教の神秘的起源に関するかれの諸学説を分け合うことは出来なかったであろう。

サンスクリット語、パーリ語、アヴェスタ語の学識をもって、その若き学者はその仕事の武器とした。それに続いて、かれは独力で研究したチベット語の学識を、そこに加えなければならなかった。そしてチベット語に関して、遂に厖大な語彙を所有するにいたったのである。かれが中国語の研究を企図したときには、五十の齢（よわい）に達していた。かれがそこで、中国語に精通することの必要にかられたのは、もともとサンスクリット語で書かれた、多くの重要な佛教のテクストが漢訳においてしか、われわれにとどけられていなかったからである。翻訳としての中国語は、時の経過において展開した一つの特殊な型（タイプ）の文章語を形成しており、翻訳上の三時期が識別せられる。

①始めから四世紀までのぎごちなく、すっきりしない古風な訳。

②おもに鳩摩羅什（四〇一―四〇九）と真諦（五四六―五六七）によって代表された自由な訳語と流暢な文体の旧訳。

③玄奘（六四五―六六四）が経や論に、義浄（六九二―七一三）が律に、不空金剛（七二三―七七四）がタントラに採用した専門的術語によって特徴づけられた新訳。

中国佛教に通ずるために、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、A・ドゥベス（A. Debesse）の「中国語フランス語小辞典」（Petit dictionnaire chinois-français）と、O・ローゼンベルグ（O. Rosenberg）の「中国佛教術語固有名詞語彙」（Vocabulary of Chinese Buddhist Terms and Names）しか用意しなかった。これらの最も初歩的な研究書を用いて、かれは中国佛教に関して匹敵する者のない熟達者の位置に到達し、その腕の冴えは、専門のシナ学者たちを感嘆させた。このようにして漢訳三蔵の扉が、かれの前に全く大きく開かれた。

ベルギーの国籍を選んでいたので、かれは一八九四年に、ガン大学教授に任命された。三十五年間、かれは同大学でサンスクリット語と、ギリシャ語ラテン語の比較

文法とを教授した。かれは卒業証書を手に入れようとする若人たちで満たされた多数の聴講者の前で、長広舌をふるうことを決して好まなかった。そのかわり、極めて選り抜きのもので講義についてくる才能ある学生たちのためにはあらゆる面倒をみた。かれは長年月のうちに、学名を馳せた種々な弟子を育成した。たとえば、日本の宇井伯寿、赤沼智善、山辺習学、宮本正尊、山口益、インドのP・L・ヴァイドヤ（P. L. Vaidya）、N・ダット（N. Dutt）、ベルギーのJ・マンシオン（J. Mansion）、オランダのJ・ラーデル（J. Rahder）などである。

その研究経歴の当初から、その若いインド学者は佛教の研究を専門とした。パーリ三蔵の聖典にあらわれているような釈尊の教説は、すでにリス・デヴィッズ（Rhys Davids）や、オルデンベルク（Oldenberg）の偉大な業績によって知られていた。従ってルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、まずはじめに佛教がヒンズー教化して、タントリズムの名のもとに知られている比較的に遅い時期の形態のものに関心をそそいだ。かれは「佛教、その諸研究及び諸資料」（Bouddhisme, Études et Matériaux）の書名で、一八九八年に刊行された大冊をそういう遅い時期の形態の業績にあてた。その書物はかなりよくない批評で迎えられた。そして歴史学者E・J・ラプソン（E. J. Rapson）は、《卑猥なタントリズム》の中に真正の佛教を認めることを拒んだ。実際に、タントラはインドにおけるすべての思想体系のもとにおかれており、八世紀から始まって完全に佛教の宗教感情を支配した。ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、みずからに差し向けられた批評に対して、弁護できないわけではなかったけれども神経質になっていた。それで魔術的な祭式に関する研究は人類学者たちに委かして、自らは、かれ一人だけが確実な足どりで登ることができる佛教煩瑣哲学の諸頂点へと方向をかえることにした。

さらに遠くド・ラ・ヴァレー・プーサンの学問業績を審査することにしよう。第一次世界大戦が勃発したとき、かれの学問業績はすでに相当なものであった。一九一四年にケンブリッジへ避難したかれは、ベルギーの青年たちのために諸講義を編成し、E・J・トーマス（E. J. Thomas）の協力によって大義釈（マハーニッデーサ）（Mahāniddesa）の校訂本を刊行し、ケンブリッジ図書館にあるジャイナの諸写本を校訂し、インド局図書館（India Office Library）所蔵の敦煌将来チベット諸写本のカタログを作成した。このカタログは、一九六二年に連邦関係局（Common-

wealth Relations Office）の配慮によって刊行されたばかりである。すべて「ミュゼオン」（Museon）を残すことに努力が払われたのであったが、ド・ラ・ヴァレー・プーサンが一九一八年にオックスフォードで短期間のヒッバート講義（Hibbert Lectures）をしたもの、及びロンドンの東洋学学院でフォアロング講義（Forlong Lectures）をしたもの、その二つの筆録はケンブリッジ出版局で刊行せられた。

大戦が終って、ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、ベルギーに帰り、ガン大学でその講義を続けた。かれは研究活動に拍車をかけ、世親の「倶舎論」と玄奘訳の「成唯識論」とについての計画をたてたのであったが、その長期に至る労作こそ、かれを不滅のものたらしめねばならなかった。一九二一年に、かれは「ベルギー東洋学会」（Société Belge d'Études Orientales）をブリュッセルに設立し、そこで諸講演を編成し、それの出版物を監修した。

一九二九年にガン大学のフラマン語事件※が突発した。

※ ベルギーの大学では、フランス語とフラマン語で講義がおこなわれていたが、ガン大学は一九二九年にフランス語での講義を禁止し、フラマン語だけで講義がおこなわれることになった事件をさす。（訳者注）

ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、多数の同僚と同じように、決定的辞職の適用を願い出て許可され、名義上の役職にあることになった。教授の仕事を免除されて、爾来、ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、すべての時間を自分の研究にあてることができた。しかしルーヴァン大学は、その教授団の中にド・ラ・ヴァレー・プーサンをひき入れなかったために、それの威名を増して、その光彩を高めるについてのまたとない機会を失墜した。

学者ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、爾来、コンコルド通りのエコール・デ・オートゼチュード（École des Hautes-Études）に転じ、そこで一連の講義と講演を行なった。そして更にベルギー支那高等学院（Institut Belge des Hautes-Études chinoise）の方に移った。そこで一九三一年に、「支那学佛教学論叢」（Mélanges chinois et bouddhiques）と題する新しい東洋学雑誌を創刊した。最初の五巻は大部分ド・ラ・ヴァレー・プーサン自身の手になった。もっともベルギー人がそれに貢献したことはいうまでもないが、そこには又、J・バコー（J. Bacot）、P・ドゥミェヴィル（P. Demiéville）、M・ラルー（M.Lalou）、H・マスペロ（H. Maspero）、E・オ

バーミラー（E. Obermiller）、P・ペリオ（P. Pelliot）、J・ピジルスキー（J. Przyluski）、R・デ・ロトゥール（R. des Rotours）、G・トゥッチ（G. Tucci）、A・ワレー（A. Waley）、及びその他ド・ラ・ヴァレー・プーサンに心からなる協力を惜しまなかったフランス、並びにベルギー以外の極東学（extrême-orientalisme）の大家たちの名で書かれた諸論文も掲載せられている。

トランプのブリッジ、クロスワードとサヴォアでの短期の休暇とは別として、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、いかなる娯楽にも折れ合いが悪かった。そのサヴォアでのわずかの休暇において、ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、マルセル・ラルーとジャン・ピジルスキーという二人の親友に邂逅した。晩年の十年間、ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、ブリュッセルのモリエール街の書斎に殆んど閉じこもった。わたしがド・ラ・ヴァレー・プーサン教授にお目にかかったのは、その書斎である。続いて、好感と信頼がよせられ、日曜日と木曜日とのすべての午前が、わたしの指導にあてられた。われわれ二人は相共に、サンスクリット原文で、「バガヴァッド・ギーター」（Bhagavadgita）と「ブラフマ・スートラ（Brahmasūtra）に対するシャンカラ（Saṃkara）註釈とを、そしてチベット訳と漢訳とで、「解深密経」（Saṃdhinirmocana）と「摂大乗論」（Mahāyānasaṃgraha）とを読んだ。

教授を訪れた人は、弱々しく、そして華奢なその横顔の前で、教授の視線の鋭さと黒髪とにうたれたままでいた。わたしには、時を隔てた後も教授の個性をつかむことが難かしかった。わたしの心に映っているかれの個性を、かりに次の如く表示すればどうであろうか。貴族としての一つの品位は、万事について一定の間隔を保ちつつ最も謙虚な姿に身をかがめがちであった。生き方の一つの強さがその風貌から光の如く放射していたので、平凡な世界から崇高な処へ人を推し上げるように見えた。独断的な態度が全然不在であるということが、判断の的確さと意見の確固たることと、よく際立って対照していた。きまじめであると人から思われたくなかったように、腕白で衝動的な一面があった。

かれが果した労苦より以上に、かれを燃やし尽した情熱の火は、予想よりも早くに、かれを消耗させた。かれは何時も華奢で弱々しかったのであるが、一九三七年の冬の間、明晰な精神と研究の能力とは、それをそのままに残しながら、かれの体力は急速に衰えていった。一九

三八年二月十八日、やむなく医者の来診を受けた。そして診察をうけるために、書斎を去ってソファーの方へ向った。医師が出て行ったので、ド・ラ・ヴァレー・プーサン夫人[1]は、処方をうかがうためにほんのしばらく傍をはなれた。数分後に夫人がもどってきたとき、すでにド・ラ・ヴァレー・プーサンは、意識の平静と、成すべきことを成し遂げたことの安堵の中で眠るかのように逝っていた。

注(1) 一八九五年十月十六日に、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、トングルにおいてオスカー・ド・シャァッエン爵の女マルグリット・ド・シャァッエン嬢と結婚していた。

一九五五年に出版された「佛教学文献目録」(Bibliographie bouddhique) 第二三号二分冊の補遺において、マルセル・ラルー女史は、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンの刊行物を著作年代順に整理した。それら刊行物の数は、三二四に達し、そこには数巻になる大著作が二十部、たいていの場合、重要な普及した雑誌に発表された個別研究や論文の百の数に及ぶもの、なお一連の覚え書や書評紹介などが枚挙せられる。かれの著作は佛教煩瑣哲学の総体を包括している。その佛教煩瑣哲学は、著者が散り散りばらばらに手をつけたものであるが、しかし結局はそれが極めて特色のあるかれの諸著作の中でも、支配的なものとなったのである。

一、ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、オーレル・スタイン卿 (Sir Aurel Stein) が中央アジアで発見した阿含断片の出版と翻訳(著作番号、n°82、87、98、99)[1]とによって、またオックスフォードの写本によって保存されている律(ヴィナヤ)の校訂(n°114)によって、聖教文学に対する知識への貢献をなした。

注(1) この番号は、以下M・ラルー女史の配慮により一九五五年、パリで刊行された「佛教学文献目録」第二三号二分冊のルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンの著作に対する遺稿に一致する。

二、ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、説一切有部の阿毘達磨に関する偉大な専門家であった。その説一切有部の阿毘達磨は、パーリ阿毘達磨に対応するものであるが、さらに一層敷衍詳述されたものである。

六足阿毘達磨のうち、発智論(n°131、144、170、181、182)、施設論(n°131)、界身論(n°131、180)、識身論(n°117、128、131)、

集異門論（n°131）からの多数の抜萃文の翻訳がある。

ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、カシミールのアラカンたちの編述である厖大な「大毘婆沙論」(Mahāvibhāṣā)を完全に読破し、倶舎論の脚註において豊富にそれを利用し、多数の抜萃文を翻訳している（n°131、135、142、144、145、173、181、182、297、301）。

屢々わたしに表明したことであるが、ド・ラ・ヴァレー・プーサンには、小乗佛教のこの大集成書を何時の日にか完訳するの願望があった。

いまいうような分野におけるド・ラ・ヴァレー・プーサンの主要な業績は、少なくとも一九二三年から一九三一年にわたって遂行された阿毘達磨倶舎論の翻訳であった。この翻訳は五巻からなって各巻三百ページをこえ、さらに序論と索引との一巻が加わっている。倶舎論はその名が示すように、「煩瑣哲学の宝庫」であり、その書において天才世親（五世紀）は、説一切有部教義の基盤に立ちながら、広く経量部師の学流に従属して、かれの個人的な思想を表出している。その著作の重要性は、久しい以前から認識されていた。すなわち、日本倶舎宗はそれに起源をなし、またヨーロッパにおいて、ビュルヌフ（Burnouf）はすでにそれの関心を払うべきことを指示報告していた。しかしながら、すべての専門家たちは、むずかしさに蔽われたその学問の前に尻ごみをした。ただルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、猛烈な労苦との引き換えにおいて、その困難に打ち勝った。それの支援となったものは、一部分がS・レヴィーによって、かねてかれに報告せられてあった本偈のサンスクリット原本、チベット訳、真諦と玄奘との漢訳、称友(Yaśomitra)のサンスクリット註釈、ならびに日本の伝統的註解であった。

倶舎論が研究される分量だけ佛教が知られるということであるが、ヨーロッパにおいてルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンのその偉大な労作が、まだ専門家たちの狭い限界をかつてこえたことがなかったということは嘆かわしい。そのド・ラ・ヴァレー・プーサンの著作が数部残存しているが、現在それは法外な価格である。一つの再版を計画するか、或いは、近頃に発見されたものをも斟酌して、新訂版が出来ればなお結構であるが、とにかく、そういう計画が早急に是非必要である。

三、紀元後当初は、インドにおいて佛教教義の発達過程に重大な転換期を顕著にしるしづける。宗教的理想は

変質する。すなわち、それは、個人の苦行によって涅槃を得るというのはもはや問題ではなく、有情の幸福に向かって無限に自らを捧げるために、佛陀の境地に達するということにあった。マハーヤーナ（Mahāyāna）、すなわち大乘と呼ばれるのがまさしくそれである。

ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンがその研究に着手したとき、ヨーロッパでは、大乘は、ビュルヌフの法華経のような若干の敷衍された経典の翻訳によってしか知られていなかった。新しい諸教義に体系を与えた偉大な哲学的な諸学派のことは、事実上全く知られていなかった。たとえば、一切皆空の信奉者である中観派の相依相待を主張する学派、「唯心」の存在を提起する瑜伽行派の観念的学派など。

ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、中観学派の巨匠、龍樹と提婆（二～三世紀）、清弁（六世紀）、月称（七世紀）、寂天（八世紀）などの最も注目すべき諸著作を埋もれの中から惹き出した。かれは龍樹の「根本中頌」(Mūlamadhyamakakārikā) を、月称の註釈と共にチベット訳によって修正して、サンスクリット本として校訂出版した（°n91）。これは中観学派の主要著作である。その翻訳を試みることが時宜に適していないことは、校訂者自身誰よりもよく熟知していた。それでその翻訳がやっと敢行せられたのは、近々一九五九年であった。それはロシア人、ポーランド人、ベルギー人、オランダ人、最後にスイス人という五人の東洋学者の肝入りで、それぞれ別々の労作によるものであった。

しかしながら、ド・ラ・ヴァレー・プーサン教授は、難渋に満ちた論諍書である清弁の漢訳「大乘掌珍論」をフランス語に翻訳した（°n196）。月称の「入中論」(Madhyamakāvatāra) のチベット本を校訂し、ほとんど完全に翻訳した（°n85、26、79、84）。神秘な詩である「入菩提行論」(Bodhicaryāvatāra) に対するプラジュニャーカラマティ (Prajñākaramati) のサンスクリット註釈を刊行し（°n46）、あわせてひときわ典雅なフランス訳をつくった（°n66）。

四、観念論的佛教（唯識佛教）に関するわれわれの知識が、シルヴァン・レヴィによる諸発見と諸業績に負うところがいかに多いかはわかっている。ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、かれの有名な学友と競いあって、「菩薩地」(Bodhisattvabhūmi) （°n51、80）の詳細な分析を確実なものとし、チベット訳にもとづいて世親の

「唯識二十論」(Viṃśatikā)(°n 86)[1]に対する初めてのフランス訳を敢行し、世親造三性説論偈の原典とチベット訳を校訂した(°n 197)。

注(1) S・レヴィが発見したテクストは、後にサンスクリット原典と新しい翻訳を添えて、一九二五年—三二年に、かれが校刊した。

けれども唯識佛教というそのテーマにおける主たる労作は、一九二八年と一九二九年にルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンによって、訳註せられた「玄奘の成唯識論」である。それは八二〇頁の著作で、そこには佛教思想が最高頂に到達したときの、その偉大な学派のための最も貴重な補遺の数々が縮約せられている。「成唯識論」は、世親の「唯識三十論偈」(Triṃśikā)の一註釈であり、玄奘は、その書において、無着、世親学派の六人の論師たちの業績に基いて、唯識教義に関する詳細と諸帰結とを説述した。価値の段階からいって、「成唯識論」は、「倶舎論」が長老派佛教に対して行なったものを大乗に対して成しとげているのである。ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンの同輩たちの言葉によれば、かれは、これらの業績によって《西洋の諸学者の中で第一級に列せられ、極東全体の中で、凌駕し難い不思議な影響力を享有したのである。》(S・レヴィ)

釈尊の降誕二千五百年を讃仰して、佛教の諸研究に致された功労に報いるために、日本は八個の金メダルを鋳造したが、これらのメダルの一つは、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンの格別の功勲にかんがみてかれに授与せられた。まことにかれこそは、この心地よい特別待遇を受けなければならない、西洋生まれの唯一人の学者であった。

佛典の研究に対して、ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、どういう手続きをとったのか。サンスクリット原典が保存されてあったときには、しばしば諸写本を一つに集め、それらを照合し、チベット訳を参照して修正し、最後にそれらを校訂するだけで、かれは満足した。

これに反して、サンスクリットのテクストが失われてあったときには、かれはチベット訳と漢訳のコレクション(チベット訳の甘殊爾(カンジュール)と丹殊爾(タンジュール)、漢訳三蔵)を頼りにした。コレクションが二つの言語で存在していたときには、それら諸訳を比較しながら、意中にサンスクリット原典を復元し、ついでそこにインドの専門術語をおさえながら、全体としてその翻訳を設定した。かれの諸著作は、それ故に、半ばフランス語、半ばサンスクリット語

という一つの訳文の形態で現われ、素人にはとっつきにくいが、専門家には便利である。こういう仕方であるからTh. チェルバッキー（Th. Stcherbatsky）及びS・レヴィとは、その方法を異にした。ということは、Th. チェルバッキーのそれぞれの翻訳は意訳に傾いておったし、S・レヴィは、インドの専門術語を、原語の構成そのものに全然符合するような仕方に作り出した同義語句のフランス語によって翻訳していたからである。

ひとたびその翻訳が設定されるとルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、註を付けるという手間のかかる根気のいる仕事に取りかかった。その仕方は、手懸りもなしに聖典の文章を引用しては、それに相違ないことを証明し、類似したテクストをひき合わせながら、晦渋な箇所を解釈し、またそれが出来るようになっていた場合には、土着の註釈から厳密に啓発を受けるということであった。

かれの同学たちの一人は、bhāṣya（註釈）ṭikā や（細註）を凡庸に評価していた。それは、同学のいうところによれば、一人の註釈者が、自分の註釈する書物のなかで探究して見出しているものは、註釈者の時代と学派との信条という枠における註釈者自身の思想であるからであるとなすのであった。ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、それに対して抗議した。けれどもはばからずに言えることは、現代の註釈学者が時代や場所の点で古代の著者より、更にそれ以上離れているということである。そして現代の註釈学者の判断は、毫も偏見から庇護せられていない。それどころではない、といってさまたげはないであろう。

☆　☆　☆

ルイ・ド・ラ・・ヴァレー・プーサンにあっては、哲学者が一宗教史家でもあった。一つの新しい資料の研究は、かれにとってその点を特徴づける機会であった。かれはそのようにして補い合いながらまた必要があれば絶えず訂正しながら、敢然と進んだ。研究生活の当初にあって、かれは問題を提起し、そして同僚たちと論争することに満足していた。そのことは、当初におけるかれの特殊問題の諸論攷、すなわち一八九八年の「佛教の歴史」(Histoire du bouddhisme)（°n 18）、一九〇一年の「インドの諸宗教」(Religions de l'Inde)（°n 27）、一九〇二年の「佛教教義」(Dogmatique bouddhique)（°n 31、35）、一九〇九年の「教義史についての若干の見解」(Opinions sur l'histoire de la dogmatique)（°n 70）において認められるとおりである。しかし、一九一〇年の「イ

ンドの宗教、すなわちヴェーダ教とバラモン教に関する入門」(Notions sur les religions de l'Inde: Védisme et Brahmanisme) (n°番号は付されていない)、一九一二年に《Christus》の中で出版された「佛教とインドの諸宗教」(Bouddhisme et Religions de l'Inde) (n°90)が示すように、かれの諸姿勢は徐々に明確になっていく。ようやく一九三〇年にいたって、ド・ラ・ヴァレー・プーサン先生の諸学説は、確実なものとなる。そして先生はやっと「佛教の教義と哲学」(Dogme et la philosophie du bouddhisme) (n°148)についてよく自分の思想を打明けようとした。その書は簡潔であるが内容の豊かに概括したものであって、それは、さらに Catholic Truth Society (n°201) と Legacy of India (n°202) にそれぞれ発表された二論文によって補足さるべきであろう。その二論文はいずれも「佛教」(Buddhism) と題せられている。

ド・ラ・ヴァレー・プーサンにとっては、その当時にあっていかにも早急な多くの仮説が組み立てられてあった原始佛教に関して、自分の諸思想を要約するための一冊の書物がどうしても必要であったのであろう。ここではかれの主要な思想を一応略述することにする。

佛教はブラーフマナやウパニシャッドの思索から流れ出たものではなく、またそれらのものの「改革」というものでも更にない。それは原初的には凡そ思索というものには無関係な、魅力ある苦行主義やヨーガの一支脈である (n°308)。

佛陀釈迦牟尼は一つのこみ入った表象である。佛陀はケルンのいう如く一つの太陽神話の同類化としても、一人の死せる神としても、オルデンベルグのいう如く単に歴史上の一人物としても考えられない。しかしながら、極めて早い時代から、古代学派の僧侶たちは、佛陀が一人の偉大な神、そして本当に神であらねばならなかったと考えた。

涅槃の本性とは、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンがかれ個人の動向によって、そこに導かれるままにあるであろうようなユニークな状態である。ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、涅槃が《自分の最も敬虔な確信の目標》であることをよく知っていた。そして、二冊の書物と十編の論文とがまさしく涅槃に当てられている。それらの中で、一九一七年の「涅槃への道」(The Way to Nirvāṇa) (n°105)、一九二五年の「涅槃」(Le Nirvāṇa) (n°126)、及び一九三二年の「涅槃についての最近の一覚え書」(Une dernière note sur le Nirvāṇa) (n°179) を指摘し

なければならない。かれの意見によれば、そして世間に受け入れられている学説とは反対に、古代人たちの涅槃とは全き一つの絶滅ではなくて、それは、思惟のない瞑想に入った苦行者が触れる一つの存在の本質である。涅槃は欲望の鎮静の根源である。それは一種の絶対的な終末論であり、輪廻の彼岸であり、最高の終りであり、不死である。しかしながら、ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、時代の経過の中で展開した佛教の諸宗派や諸学派が、涅槃について相当異なった概念を抱いていたことを任意に認めていた。

ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンが、詳細に論じるようになっていた歴史学やスコラ学的な問題点は無数である。ここでは選択をして、次の諸論項を枚挙することにしよう。佛教における結集の会座の非常に複雑な問題（n°68、78）、業と果報と心相続との間の関係（n°31、35）、諸現象の縁起という機能（n°96）、中観学派による客塵と真如（絶対）（n°191、196、300）、唯識学派における習気の心理学（n°253）、無着における真如（n°141、300）、より広い面に関するものとしては大乗の神秘学、菩薩の行道、佛身など（補遺n°139）。一九二七年に刊行された「佛教倫理」（La Morale bouddhique）（n°130）というあまりにも注目されていない書は、倶舎論研究のための優れた入門の構成要素となっている。同様に一九三二年に出版された「中観についての諸考察」（Réflexions sur le Madhyamaka）（n°196）は、龍樹系諸教学のための最上の伝授書と見られる。著者の確認するところによれば、中観説は諸法を相対的真理（世俗）に於て認めるが、絶対的真理（勝義）としては諸法を否認する。従って中観説は諸法を肯定せず、また諸法を否定しない。《諸法自性》すなわち実在は、有でもなく非有でもない。それは実在と見える物の欠如であり、空なるものの空性であり、存在しないものの非存在そのものである。一個の絶対なるものとして空性を実体化することは致命的な誤謬である。中観を汎神論的な一元論としたロシアの学者チェルバッキーは、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンの論文を仮借せずに攻撃した。誤読され、誤解されたことに厭き厭きし、既に病によりやつれたド・ラ・ヴァレー・プーサンは、一九三八年に出版されたかれの論文 Buddhica（n°300）の中では逆行しているように思われた。しかし、わたくしは一九三二年の「中観についての諸考察」は、龍樹系思想の最も的確な解釈であることをあくまで信じている。

青春時代にルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、そ

ういう凹入する曲線をもたなかった。論争に関するかれの趣味が近代主義の葛藤の中に、かれを引きずり込んだのである。礼儀正しい冷静な態度で、かれは福音書の中に佛教の一つの代用品のあることを見ていたA・J・エドムンド（A. J. Edmunds）の学説と戦った（°n53）。しかし実を言えば、何よりもまず確固たる調査に基礎をおいていたかれの弁証論は、反動主義者のそれでもなく進歩主義者のそれでもない。（「哲学神学雑誌」Revue des sciences philosophiques et théologiques 一九一二年、六巻、四九〇頁―五二六頁に載せられた「インドの諸宗教の歴史と弁証論」L'Histoire des religions de l'Inde et l'Apologétique 参照）。宗教現象の中で、とくにかれの心を激しく打っていたものは、哲学上の理論や体系と、最も広義における言葉の適用と、の間にあって、逆説的な表われをもった激しい闘争であった。かれはその主題に関して、一九〇四年、「ベルギー社会学会」（Société Belge de Sociologie）へ提出した「体系的精神と宗教」（L'esprit systématique et la religion）（°n50）と題する細心の注意を払った研究論文の中で述べている。その二十世紀初頭の若い一知識人が思うままに公言している諸思想は、否定出来ない参考資料になる一つの関心事を提供している。

☆　☆　☆

ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、フランス及びイギリスの雑誌のために著しく情熱のこもった関心をもって、非常に数多くのアジア関係の雑誌に寄稿した。ベルギーにおいて、かれ自身多くの雑誌を主宰した。一八九二年から一九一五年にわたって、かれは佛教の雑報を含む「ミュゼオン」の諸冊をうずめた。一九〇九年以来はジェームズ・ヘスティング（James Hastings）の編集した「宗教倫理辞典」（Dictionary of Religion and Ethics）の主要な編纂者の一人であった。三六の項目はかれの手になっており、それらの中での数々は特に宇宙開闢説と大乗とにあてられている。これらの項目は今なお古くなっていない。一九二一年から一九三一年にかけて、一から二九までの番号のついた「佛教覚え書（ノート）」（Notes bouddhiques）という題のもとに、そして「覚え書」のそれぞれが一分冊に価値が等しいので、結局かれは「ベルギー王立アカデミー年報」（Bulletin de l'Académie Royale de Belgique）を大きくした。最後に一九三二年から一九三七年にわたって、かれは「支那学佛教学論叢」の大部分を執筆した。そしてそれの報道を同様に確

かなものにした。

☆　☆　☆

「世界の歴史」(Histoire du Monde) 叢書の編集者並びに中心監修者である、E・カヴァイニャク (É. Cavaignac) の強要にも似た友情にほだされて、ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、一九二四年から一九三五年の期間に出版された三巻からなるインド史(n°124、140、230)を著わした。そこでは理路整然たる説明よりも諸問題の焦点を合わせることが問題である。著者は出来るだけ完全に出所・源流を分析する。それから著名な歴史家たちの相互に矛盾している話題を指摘しながら、かれらをかわるがわる登場させる。そして簡潔な評価がつづく。「極めてもっともであるが疑わしい」。

ある人は、これはけしからぬと非難した。すなわちかれらは尋ねていった。「何も言うべきことがないことを述べるための、まるっきりの一冊の本があるとは何の為なのか。この一致しない数々の見解の行列の中には、一つの隠れた皮肉と不可知論行使の一つの授業とがあり、それが存在することは実際において殆んどその必要がない」と。

ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、それに対して答えた。「わたくしとしては、解決が困難であり不可能な大きな諸問題に関しては、書記・報告者の役に甘んじてなっているのである。自分としては無邪気な仮説の数々と若干の社会学者の不当なうぬぼれと及び若干のインド学者には必ずあるところの予想しがたくまた風変りな和解の調停の数々とを書取るという陰鬱な楽しみを味わっているのである。」

それ以来、屢々極めて詳細なインド史の数々が、東洋におけると同じく西洋においても出版せられた。しかも世界的に評価せられた一人の歴史家がごく最近わたくしに打ち明けたところによると、かれの意見では、最も完全であり最も確実な考証はルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンのそれであったのであると。

文献学者としてド・ラ・ヴァレー・プーサンは、原文を細心綿密に遵守し、そこに何かを添加したり、そこから何かを削除したりすることをせずに原文を解釈した。歴史家としてまた同様に哲学者として、かれは主観的構成や思弁をひどく嫌った。そういうあり方から考えるとかれは佛教的展望の影響のもとにあったのか。或る人はそれを問題にするかもしれない。しかしわたくしにおもわれることは、龍樹はかれ自身、自分に委ねられるよう

な相対論（相依相待の縁起）の教えは何等それをも持たなかった。龍樹にあっては懐疑論は単に方法的なものではなくて先天的なものであった。

そういう心の慎しみというものは、もしかれが宗教的な確信と政治的な意見との強さによって、それを実践の中で調整していなかったならば、かれの存在性を複雑にしていたことであろう。かれが言っているように、かれは、〃われわれの進歩に必要な信念を危険にさらす〃ことからは身をかわしながら、曾てそれから遠ざかりはしなかった。批判精神と伝統尊重とを均等に分配することが、それの均衡を確保したのであった。

かれはフランスへの深い愛情を学問への情熱に結びつけていた。かれの内心の動きは、喜びであっても悲しみであっても、ベルギーの南の隣邦（フランス）に繰り拡がっていった出来事に密接に従属していた。そして、かれはフランスに対抗して差し向けられた批判というものを全くかれ個人の侮辱として感じていた。

ド・ラ・ヴァレー・プーサンの人をひきつける人柄と学問業績の特質とは、かれに、同僚たちからの情愛と弟子たちからの尊敬とをもたらした。かれが求めようとすることなしに数々の名誉がかれに到来した。かれは、フランス学士院に対応するベルギー王立アカデミーの会員であり、オックスフォード大学の名誉博士であり、極東フランス学院並びに王立アジア学会の名誉会員であった。クーロンヌ勲章佩用者並びにレオポール勲章受勲者であるド・ラ・ヴァレー・プーサンは、同様に多くの諸外国の勲章の肩書を備えていた。ド・ラ・ヴァレー・プーサンの業績は、フランス学士院によりかれに授与されたスタニラス・ジュリアン賞や、一九二〇年から一九二九年の期間に文献学に対し十年毎に行われる賞によって名誉を与えられていた。この機会にあってシルヴァン・レヴィは、特に称讃に充ちた証言をド・ラ・ヴァレー・プーサンに与えた。シルヴァン・レヴィは、誌した。「ド・ラ・ヴァレー・プーサンの著作は辛うじて一人の競争者を許容するという偉大さである。……およそ文献学界のいかなる学者も、ベルギーの学問にド・ラ・ヴァレー・プーサン以上の光彩を与えたものはなかった。」と。日本の学界及び宗教界にあって高所にある一人物、山口益氏は「ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサン教授の面目は、佛陀の教法の真個の表現形態を全幅の価値のままに獲得しようとする念願にある。……その点からいって正確な形態に整えられた原典の探求という限界に於いてルイ・

ド・ラ・ヴァレー・プーサンの業績は佛道の一指導者であったということである」とかれの立場で誌した。佛陀釈迦牟尼が Majjhima (III. p. 6) の中で maggakkhāyi 〃道を指し示す人〃といって自分自からを明示していることに注目するならば、それらの称讃の言葉の範囲が量られるであろう。

ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンは、ある日、つとめて控え目に、わたくしに言っていた。「わたくしは倶舎に生きた人間である」と。そして、それはかれが後代に認められている通りである。

註記—上に注意したルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサンの遺作の他に、さらに左記のものが枚挙せられる。

É. Lamotte : Louis de la Vallée Poussin (Revue du Cercle des Alumni de la Fondation Universitaire, IV, 1933, p. 1–17)

G. Combaz et É. Lamotte : (Le Flambeau, 1938, p. 273–286)

M. Lalou et J. Przyluski : (Mélanges chinois et bouddhiques, VI, 1938, p. 5–10)

匿名 : (Kampuchea Sauriya, カンボジア語、X^e sannée, p. 3)

P. Masson-Oursel : (Journal Asiatique, CCXXX, 1938, p. 287–289)

宇井伯寿、宮本正尊、山口益、久野芳隆「佛教研究」第二巻三号　昭和十三年　一四三頁—一七二頁。

(後記) 本稿は、ベルギー・ルーヴァン大学のエチエンヌ・ラモート (Étienne Lamotte) 教授により「ベルギー王立アカデミー年報」(Annuaire de l'Académie royale de Belgique, Bruxelles, 1965) の第一三一年号に発表された「ルイ・ド・ラ・ヴァレー・プーサン教授についての略述」(Notice sur Louis de La Vallée Poussin) の全訳である。Louis de La Vallée Poussin 教授の Poussin の音訳は、「プサン」或いは「プサーン」が正しいと考えられるが、従来、わが国で親しまれている「プーサン」をあえて用いることにした。ド・ラ・ヴァレー・プーサン教授、並びにかれの直弟子であるラモート教授については、ここにあらためて紹介するまでもないほど著名な佛教研究の第一人者である。ラモート教授によるこの「略述」は、極めて格調の高いフランス語で綴られ、ド・ラ・ヴァレー・プーサン教授の真価をあますところなく伝えられており、わが国の佛教研究者にとり得るところ少なからざるものがあると信ずる。

この略述の訳出は、先ず最初に大学院修士課程の松

村健彦君（インド学専攻）が試訳したものを、後に大谷大学佛教学研究室が加筆、修正したものである。

翻訳に際しては、佐々木教悟教授、「法宝義林」編纂のため在洛中のJaques May, Rubert Durt両氏から多大の御教示をいただいた。なお、好意ある authorisation を与えられたE・ラモート教授、並びにベルギー・アカデミーに、またこの翻訳に貴重な御助言を惜しまれなかった方々に、誌面をかりて厚く深謝申し上げます。